

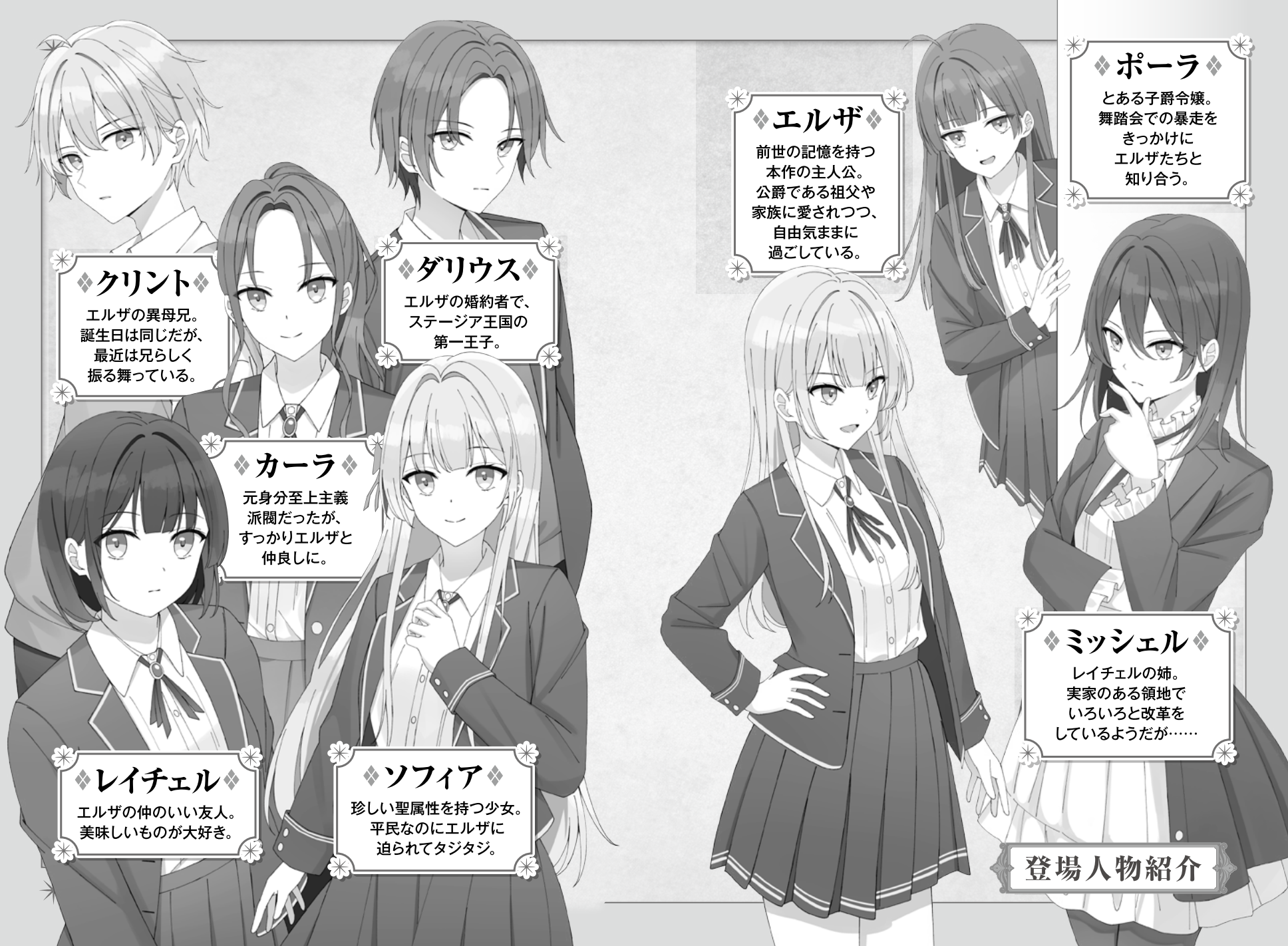
公爵一族の
御令嬢に
転生？

努力が報われる異世界で、可愛いもののために本気出します

3

Hetamaro
へたまる

ill. 千道センリ



◆ クリント ◆

エルザの異母兄。
誕生日は同じだが、
最近は兄らしく
振る舞っている。

◆ ダリウス ◆

エルザの婚約者で、
ステージ王国の
第一王子。

◆ カーラ ◆

元身分至上主義
派閥だったが、
すっかりエルザと
仲良しに。

◆ レイチェル ◆

エルザの仲のいい友人。
美味しいものが大好き。

◆ ソフィア ◆

珍しい聖属性を持つ少女。
平民なのにエルザに
迫られてタジタジ。

◆ エルザ ◆

前世の記憶を持つ
本作の主人公。
公爵である祖父や
家族に愛されつつ、
自由気ままに
過ごしている。

◆ ポーラ ◆

とある子爵令嬢。
舞踏会での暴走を
きっかけに
エルザたちと
知り合う。

◆ ミツシエル ◆

レイチェルの姉。
実家のある領地で
いろいろと改革を
しているようだが……

登場人物紹介

第一話 おめかし

私はエルザ・フォン・レオハート。

ステージア王国の公爵とうしやへの一人であるレオハート公爵を祖父に持ち、さらに前世の日本での記憶を持つている。そう、いわゆる異世界転生者というやつだね。まあ前世の自我がややふやなので、記憶に近いものなだけけど。

そんな私は、幼い頃こころから魔法や剣の訓練を続け、今では英雄と肩を並べられる、レベル三百を大きく超えていた。

そう、この世界はゲームよろしくレベルの概念があって、それに気付いた私はレベル上げにどっぷりとはまってしまった。

さらには、国内最高レベルに到達したおじいさまに鍛えてもらったのだから、戦闘技術もそれなり以上にある。

それから、姿を偽って冒険者としても登録して、おじいさまと一緒にダンジョンに潜ったり、前世の知識を活かして公爵領を発展させたりと、異世界生活を楽しんでいた。

……公爵一族の令嬢れいじやうとは言ったものの、父様が伯爵はくしやくなので、正確には伯爵令嬢だけけどね。ともかく、貴族令嬢として、遊んではかりもいられない。自分のためにも。

そうやって、いいところのお嬢様として奮闘しながら年月を重ね十二歳になった私は、王都にある貴族学園に通うことになった。

同い年の異母兄弟クリントや、珍しい聖属性を持つソフィアと一緒に学園に通信始めた私は、レイチェルやカーラという友人もできた。それと、この国の第一王子にして私の婚約者であるダリウスも、一学年上だけど同じ学園に在籍しているので、たまに顔を合わせている。

そんなこんなで、学園生活を楽しんでいるんだけど、高位貴族以外を見下している身分至上主義派閥と対立することになるし、そんな中で試験があったりして、いろいろと面倒なのだ。それでも私はやりたいようにやってるんだけどね。

「準備はできましたか？」

部屋の外から、クリントが声を掛けてくる。

今日は前期と後期の間の長期休暇最大のイベント……王宮での学生ダンスパーティーの日だ。卒業生のプロムほどの大イベントではないけれど、参加者は準備に余念がない。

まあ、前期では色々なことがあったような気がしたけれど、すぐく順風満帆だったかな？

身分至上主義派閥が、レイチェルやソフィアにちよっかいを出してきたから、軽い話し合いで仲裁したり、物理でお話したり。

ん？ レイモンドが噴水に沈んだ、レオハート噴水事件？

あれは、ちよっとした行き違い。あとは、食堂でも色々なイベントがあつたようななかったよ

うな。

他には、お友達もだいぶ増えた。

教室で挨拶あいさつをすると、声を出して返してくれる子もかなり多くなってきたし。レイチェルとソフィア以外にも、仲良しさんができたのは嬉しいよね。

国王陛下の近衛騎士を務める騎士様をお父様に持つフローラとテレサは、剣術の授業も一緒に、なかなか見どころがある。

それから、もともと身分至上主義派閥で、最初はソフィアに対して何やらやらかしそうな子だったカーラ。

紆余曲折うよぎょせつあつて、今では身分至上主義派閥から疎そまれているようなので、彼女も私のグループに入っている。話してみると、意外と素直で可愛い……最近は、なぜか何かと私の世話を焼きたがる。そして、その身分至上主義派閥のトップに位置する貴族家の、オルガ・フォン・ビルウッド。彼女とも……なぜか、補講で仲良くなった。なぜだろう？

ダリウス？ 彼との仲は……一進一退というか、特にこれといって関係性は変わってないかな。少しは彼も成長したとは思いうけれど、まだまだ恋愛対象に入るような感じでもないし。

親同士が決めた婚約とはいえ、身分的にもどうにもできそうにもないので、なるべく折り合いをつけてお互いに良き関係を築けたらいいだろう。

そして、今日のダンスパーティーには当然、そういった学友たちや先輩方も全員揃そろう。

もちろん、身分至上主義派閥の子たちも……それは、別にいいけどさ。

そんなわけで現在は、侍女たちが気合を入れて、私をおめかししてくれてるわけだ。その最中で外から声をかけてきたクリントに、私は答える。

「ちよっと待って、いま終わったところだから」

自分の服装を鏡で確認して、溜息^{なげいき}を吐く。あれほど抵抗したのに、私の腰はいまコルセットで締め上げられている。

そのはずなのに、ウエストに普段と変わった様子はない。

侍女が締め上げた程度で、私の腹筋は小揺るぎもしない。するはずがない。決して、腹筋に力を入れて抵抗したわけではないというのに。

そもそも、私たちくらいの年齢では、コルセットはマストアイテムというわけではない。普通の令嬢は興味を抱いても、嫌なら別に着けなくてもいい程度のものだ。

ただし、高位貴族を除く……という文言がついてくる。

伯爵家でも上の方の子たちはほとんどが装着させられているのだから、公爵家の私も着けた方がいい。それに、ダリウスがいるし彼と踊るかもしれないとなるとね。

本音としては、周囲に気合が入っていると思われたくないから、制服で出たかったよ。

というわけで装着したコルセットではあるけれど、それでも胴回りに密着した衣類というのは、窮屈で仕方ない。

本気を出して、紐^{ひも}を引きちぎりたい衝動に駆られる。もちろん、腹筋の力だけで……

でも、それをやると色々と女性として終わる気がするよね？ コルセットの紐が切れて、コル

セットがはじけ飛ぶとか。

それこそ、少年漫画の世界だよなぁ……間違っても、中世欧州風の転生物語とは似つかわしくない肉体^{スベツク}を手にしてしまった感が強い。

レベルによるステータスの力もあるから、見た目がゴリマッチョじゃないのがせめてもの救いかな？

そんなわけで、侍女たちが気合を入れて仕上げた私がこれから向かうのは、パーティ会場だ。開催場所は……うん、最初に言ったけれど王城なんだ。

学生をメインに集めた、若者だけの舞踏会が開かれる。学生間の親交を深めるために、王家が主催する舞踏会なのだ。

卒業したばかりのOB、OGも参加するけど、主役は私たち現役学生。

休みということで領地に帰ってしまった子たちは、残念ながら参加はできない。

いや、わざわざこのためだけに、とんぼ返りで王都に戻ってくる子もいるらしいけど。主に、王都の付近に領地を持つ貴族の子たちだね。

遠方の貴族の子たちは、当日まで王都に滞在するか、完全に諦めるかの二択になってしまう。

私の場合、今月は王都にしているから参加できた。お父様が寂しがっていると手紙が来たけど、知ったこっちゃない。クリスお兄さまが帰ったのだから、それで満足してもらいたい。

成果発表会を見に来たおじいさまは、こちらにまだ滞在しているから私は寂しくない。今度、王都の冒険者ギルドで依頼を受けて一緒に出掛ける約束もしてるし。

お母様には少し会いたい気持ちもあるけども、こっちにはおじいさまもクリントもいるからね。お父様には申し訳ないけれど、ホームシックになることはないだろう。

それに来週には、合宿という名の、学園主催の小旅行もあるし。

これにも絶対に参加したかったから、王都にすることにしたのだ。

ちなみにレイチェルとカーラたちもその合宿に誘ったけど、最初はあまり乗り気じゃなかった。私の表情を見て、渋々といった感じかな？

彼女たちに話を持ち掛けたときに、断られそうな雰囲気を感じ取って、つい本気で悲しくなってしまうた私は、溜息を吐いて学園からのお知らせを書いた紙をそっと畳んだだけ。

それから、外を見て黄昏^{たそが}れて呟^{つぶや}いてみただけだよ。

「そうよね……よく考えると、そこまで魅力的ではないわよね……」
ってね。

そしたらみんながぜひ行きたいです！ と声をあげてくれたのだ。

別に、私が強制的に誘ったわけじゃないし、別に、情に訴えるためにそんな顔をしたわけでもない。自分の気持ちを誤魔化して、整理しようとしてただけだから。

その後、私たちの話を聞いたオルガも、急ぎよ参加を表明してた。

「皆さんが行かれるなら、私も一緒にしようかしら？」

と名乗り出てくれたのだ。

せっかくの旅行気分なら、知り合いが多い方が絶対に楽しいし。

ただ、残念ながら、ソフィアは参加できない。両親の営む宿屋を手伝うために、実家に帰るから。学生が長期休暇のこの時期は、書き入れ時でもあるからね。王都から地方に移動する人も増えるだろうし、その途中でソフィアの村に寄る人もいるだろう。

あとは、彼女自身、三ヶ月も王都にいて、ホームシックになったのもあるだろう。

できれば、私とその寂しさを埋められたらよかったのに。成果発表会のために両親がこっちに来ていたから、余計に実家に帰りたくなったのかな？

それでも、今日の舞踏会にはソフィアも参加する。

周囲の子たちの話を聞いたり、寮の子たちが全員このために残っているのを見たりして、参加しないのはさすがにまずいと感じたのだろう。

とはいえ、ダンスパーティーに着るようなドレスを彼女は持っていない。だから、うちで余ったドレスを貸し出して、うちの馬車で一緒に行くことになった。

そうすると、早朝からおめかしをしないといけないため、彼女は昨日からうちに泊まりに来て
いる。

それもあって、今日の私はいへん気分がいいのだ。

ソフィアとは事前に色々と話したけれど……私に指摘されるまで、まさか今回のダンスパーティーに制服で参加するつもりだったとは。すごい勇気だと思うよ。そして、事前に話をしておいてよかった。

……てか、さすがにこの状況で平民の生徒を参加させるなら、学園が王城側でレンタルでいいか

ら、ドレスの準備をしてくれてもよくないかな？

自由参加とはいえ、ほぼ強制みたいなものだったわけだし。

貧乏貴族だったら、衣装を揃えるだけでも大変だと思う。

だからと言って、もちろん、今回私が用意したソフィアのドレス代を、学園や王城に経費として請求したりはしないよ。

私が出してあげたいから。そして、誰がソフィアの後ろにいるか、周囲に見せつけてやらないと。そう意気込んでいたら、一緒の部屋にいたソフィアも準備が終わったらしい。

衝立がどけられて、ヘアメイクの終わったソフィアが恥ずかしそうに顔を見せた。

周囲の認識としては銀色とされている、光を反射する透き通るような白髪。それに合わせるドレスの色は、本当に悩んだ。

濃い色のダーク系にして、コントラストを出すか。パステルカラーで上から下まで柔らかな印象を出しつつ、明るい感じに無難にまとめていくか。

結局、ちよつと濃いめのパステルグリーンの、ロングフレアドレスにした。

袖はタイトな感じで、肘下まで。胸元は首元まで、しっかり襟がしまるタイプ。裾も足元から膝下までは、レースを使ったシースルーの生地をあしらったうえで、極小の金属片を使ったスパンコールも、ちりばめている。

こうやって私がドレスを選ぶのは珍しいことなので、楽しかった。だって、私のドレスはおじいさまやお母様が準備してくれるから、なかなか自分で選べないんだよね。

今回も私の分は、お母様が選んで、おじいさまがお金を出してくれてたし。

本当なら、私はダンスに関しては男性も女性もいけるから、パンツスタイルのドレスをそれとなく提案しようと思っていたんだけど……すでにお母様が選んで仕立ててもらったものが届いたから、手遅れだった。

少しは、子どもの意見も参考にしてもらいたいところだ。

ちなみに、届いたのは暗めの赤いエンパイアラインのドレスだった。ワインレッドと言えば聞こえはいいけれど、わずか十二歳の少女に着せるようなものなのだろうか？ かと云って、私が選んでも確かに細身のドレスを選ぶとは思うけどね。

公式な催し物には、TPOを弁えたドレスが必要だから、その暗黙のルールに詳しくない私は、突飛なものを選ぶと思われるのだろう。

家族だけでなく、家人からも……信用がない。小さなパーティとかなら、まだ選ばせてもらえるけど。家の中にあるものから。

だから、今回ソフィアのドレスを選ぶのは、とても楽しかった。

椅子から降りたソフィアは、私の前に少し躊躇した様子で出てくる。

うん、はにかんだ笑顔と、照れて控えめなポーズになっている姿は、満点に可愛い。

「こんな豪華な衣装、汚したり破ったりしたらと思うと怖くて動けません」

「大丈夫！ 多少の汚れどころかそこそこ頑固な汚れでも、おばあちゃんの知恵袋と私の魔法ですぐに綺麗になるよ」

「それをやってもらうのが、畏れ多いです」

何を遠慮してるんだろうね、この子は。

魔法なんだから元手は掛からないし、気にしないでいいのに。

「破れても、それも私の魔法やうちの裁縫師さいほうしでなんとかできるよ」

「エルザ様の魔法が大変優秀なのは分かっていますが、その手を煩わづらわせるのが申し訳ないんですって」

「その程度の魔法、息をするようにできるからね？ 手間でもなんでもないよ！ まあでも大丈夫、液体は弾くように魔法でコーティングしてあるから」

「……このドレスの価値が恐ろしくて、確認もできません。もう一度、聞きますよ？ 本当に、お貸しいただけるのですよね？ ……貸していただくだけですよね？」

「そのつもりだったんだけどね……ソフィの体形に合わせて仕立て直してあるから、あげるよ」

「ほら！ 家にあるもので、古くて汚れていいものを貸してくださいとおっしゃったじゃないですか！ 話が違います！」

「……そういうこともあると思うよ？」

「ありませんって！」

私の回答に、ソフィアが溜息を吐いている。

ソフィ、もう少し私に甘えてもいいんだよ。目指せ、ソフィアの足長おじさん！

といつても、私の援助は全然陰ながらもいし、忍んでもいないけどさ。

「本来なら入学式で選んだ分岐ルートの相手からドレスが届き、馬車で迎えが来るはずでしたが……裏ルートに完全に突入してますね」

ハルナが私たちを横目で見て、また大きな独り言を呟いている。

呟いているという表現が、正しいかどうか分からないほどの声量だ。本当に、聞かせようとしてないの？ それ。

話は戻るけれど、友人たちには個人的な旅行も提案したけど、これもあまり乗り気じゃなかった。やっぱりみんな、実家関連で色々忙しいらしい。

あと、お金持ちの御令嬢ばかりだけれども、国外旅行に行くわけでもない。国内旅行しか、選択肢はない。領地によってはガラリと雰囲気が変わるから、異国情緒を味わうことはできるけどね。

国外は国際情勢的にハードルが高すぎるのだ。

他国の貴族令嬢とか、もう格好の餌食えじきだね。連行というか、拉致らちされて人質にされる可能性も高い。

旅先を同盟国の中から選んでも、完全に安全と言い切れるかどうか。

王国から正式に通達を出してもらって、外交の一環として賓客として迎え入れてもらうのが一番確かだけど。そうなると、自由な観光はできなくなるし。

うん、残念。私一人なら、どうとでもなるんだけどね。転移魔法か、龍王のサガラさんに送ってもらって、こっそりと観光することが出来るからね。

ソフィア、クリントと一緒に屋敷を出発して、パーティ会場となる王城に着くと、すでに多くの子息令嬢が集まっていた。

私とソフィアは、クリントにエスコートされながら大広間の中に入っていく。

今日は金髪を後ろに撫でつけた、かっこいいタキシード姿のクリント。流れるような自然な動作で、両手に花を携えて登場だ。

会場内から、溜息が漏れている。私も、ほうっと溜息が出た。うちの兄も、なかなかやるではないか。

「ほらっ、やっぱり私は後ろからエルザ様のドレスの裾を持ち上げて、中に入るくらいでよかったんですよ！」

ソフィアが小声でクリント越しに、何やら喚いている。小声で喚く姿が、餌を強請る雛鳥みたいで可愛い。

「ほらほら、これでも食べて落ち着いて」

私は鞆から餡ちゃんを出して、クリントの前から手を伸ばして彼女の口に押し込む。

「もう」

ソフィアは不満そうにしながらも、ちよつと笑みを浮かべて俯いてしまった。

「キヤー！」

会場から、知り合いっぽい声音の黄色い声援が聞こえた気がしたけど、とりあえず放っておこう。そしてそれ以外にも、声が聞こえてくる。

「おい、あの令嬢は誰だ？」

「ん？ ああ、クリントが連れてきたなら、当然妹のエルザ様だろう」

「そっちじゃない、反対側の……その、少し儂げな女性の方だ」

「誰かな？ 確かに綺麗な子だな」

おお……うちのソフィの噂話かな？

可愛かるう、可愛かるう。このときのために、昨夜から私の専属侍女たちが磨き上げて、朝からは全力でおめかししてたからね……私と違って、いちいち不満を漏らさないから、楽しくなつてはりきってしまったとか。

面倒なお嬢様で、悪かったわね！

それはそうと、周りの反応から分かる通り、私の友達たちはみんな可愛いんだ。早く、私の周りに侍らせたい。可愛い子に囲まれないよ。

今回のパーティには、入学前の幼い子たちは参加しないからね。残念ながら、癒しが足りないんだよ。

ということ、さてさて……うちの可愛い子たちはどこかなつと。

「あのドレス、すごく綺麗」

「シャンデリアの光を反射して、輝いて見える」

キョロキョロと周囲を見回しながら友達を探して歩いていると、そんな声まで聞こえてくる。

ソフィアのためにあつらえた渾身のドレスを褒められて、思わずニヤニヤしてしまうね。

「彼女の髪の毛も、綺麗……」

「うん、全身で光を反射して輝いてるのって、なんか本物の聖女様っぽい」

おお……おお？ 本物の聖女？ ソフィア自身にも、そんな言葉が向けられるのを聞いて、思わずそっちを向いてしまった。目が合った子が、少し照れ臭そうに首を傾げて微笑み返してくれたので満面の笑みでお返しだ。

そして、噂の的となっているソフィアはというと、頬を赤く染めて俯いて、私があげた飴ちゃんを口の中で転がしていた。

自分が褒められていることには、気付いているみたい。ソフィアは可愛いんだから、もっと自信を持ったらいいのに。

それにしても、聖女か……そういえばハルナがソフィアに対して、そんなような独り言を言ってたような気が。まあ、確かにソフィアは聖女っぽいもんね。聖属性魔法も扱えるし。

もともとダリウスとも、聖属性持ちは珍しいから保護しないとみたいな話をした気もする。

ただの村娘だった彼女は、周囲に騙されてあっさりと政治利用される聖女になる可能性も高いから。だから王族が、うまく彼女を保護できなければ……何かしらの厄介事の火種になりかねない。

いづれにせよ、聖属性を使える以上、王国認定聖女か、教会認定聖女にはなれるはずだけど、そうなるの色々と不都合も出てくる。

そう、私と一緒に過ごす時間が減るとかさ。

だから、そうならないように、先に私が確保しないと！

フッフ



「お二方とも、本当に素敵ですね」

それにしても、行く先々でそんな言葉ばかり掛けられると、さすがの私も少し耳がかゆくなる。

いや、さてよ？ 二人って言うてたから……それには、私も含まれて……いるのかな？ この場合、クリントとソフィアの可能性もあるよね。

今日のクリントは、髪型も相まって大人っぽさ三割増しくらいになってるし。妹の私からしても、かつこよく見えるし。

「クリント様、少し後ろに下がってくれないかしら」

そして聞こえてきたのはそんな失礼な言葉。

その声は聞き覚えがある……というか、もうオルガの声で間違いない。

いやいや、気配や声で分かっているだけ、ちょっと反応が大きすぎて、あえてスルーしてた。

さっきの黄色い声援を送ってきたのも、彼女で間違いないだろう。友人のこの反応は、少し気恥ずかしい。

「分かります！ 綺麗な御令嬢二人が並ぶところを見たいです」

そんな彼女の意見に、全力で頷きながら同意してる子がいるけど、誰だろう。オルガの知り合いかな？

彼女のすぐ横というか、少し斜め後ろに立っているショートカットの可愛らしい少女。どこかで、

見たことがあるような気がするけど。

同じ学園に通ってるから、そういうこともあるか。

「あら、あなた話が分かりますわね。もう少し、クリント様が控えてくださったら……」

どうやら、二人は知り合いではないらしい。

オルガの声が聞こえていただろうクリントが、私たちの手を離しそうな雰囲気だったのでぎゅっと握る。逃がさん！

「痛い！」

あっ、ごめん……

「知り合いのところまでは、最低でもエスコートしてくださいね。私とソフィアだけになったら、歩きにくいですよ」

うっかり力を入れすぎたことを誤魔化すように、クリントに笑顔で声を掛ける。

そのクリントは、こっちを見て顔を顰めていた。

本気で痛かったのだろうけれど、反対の手はソフィアが腕に手を置いているから、さずかることもできないみたい。

本当にごめんよ……つい、割と本気で握ったから、骨に異常がなければいいのだけど。

男子の視線、特にソフィアに向けるものに怪しい雰囲気を感じたので、しっかりと虫よけを身に着けておかないといけない。そう思って、逃がさないようにと力が入ってしまったただけだから。

と言っても、今の私は筋力関連を十分の一に制限するアイテムを身に付けているから、うっかり

でも手を握り潰すようなことはないはずなんだけどね。

レベルが三桁^{けた}の後半になったあたりから日常生活に支障が出てきたから、おじいさまとお揃いで作ってもらったデバフ特化の腕輪だ。

実質的にはレベル六十〜七十くらいの筋力に落ち着いている。それでも十分強いんだけど。

しかし、本当に周囲からソフィアに向けられる視線が、こう……なんというか、男どもからは是非とも仲良くなりたいたいオーラが溢^{あふ}れ出てる。

これは、絶対に傍から離れられないけど、知り合いが多いからそうもいかないし。なんなら、今日はクリントをソフィアの専属護衛にしようか……

それから、友達の人々と合流できたので、しばし歓談の時を過ごす。

身内同士での会話を楽しみながら、パーティ会場内の周囲の様子を窺^{うかが}う。

周囲には結構、緊張した面持ち^{おも}の子たちも多いし、思った以上に、私たちの集団は快適に過ごせているかもしれない。

それに、私やオルガに挨拶をしにくる子は多いけれど、この輪に加わろうという子は、いないようだ。

「この料理、美味しいです」

そんな感じで周囲を見ていたら、すぐ傍にいたフローラが、おっとり料理の感想を口にしてるのが聞こえたので、そちらに目を向ける。

彼女が口に運んでいるのは鴨^{かも}の肉っぽい何かだ。たぶんローストしてあるのだけれども、掛かっているソースが分からない。

見た目が鴨肉^{かも}だけれど、料理の種類まではさすがに分からなかった。ソースは色がオレンジがかっているから、柑橘系^{かんきつ}かな？ その横で、オルガも同じものを食べて微笑んでいた。

どうやら、彼女の口にも合ったみたいだ。

そんな彼女の茶巻き髪は、いつもよりも気合が入っているように見える。そして真っ赤なドレスも、よく似合っている……まさかの色被りだけれど、あつちには目にも鮮やかな赤だからいいか。

それよりも、フローラが食べているものが気になる。そこまで美味しいなら、是非ともレイチェルにも食べてもらわないと。

「だってさ、レイチェル。すみません、その使用人さん。この料理を少し多めに持ってきてくださる？」

レイチェルの方に視線を向けると、彼女の視線も、オルガとフローラのお皿に注がれていたからね。目は、口ほどに物を言うとはよくも言ったものだ。

私は給仕の男性を捕まえてお願いする。

ただ、私の声掛けと一緒にいたテレサが不思議そうにしていた。

「エルザ様って、どうして使用人の方に謝られるのですか？」

「ん？ ほら、彼にも予定があるかもしれないじゃない。他の方に料理を頼まれていたりとか。だから、一言断ってお願いしてるだけよ」

テレサが不思議そうに聞いてきたので、それらしく応えておく。

この世界で、貴族は使用人に気を使ったりはしないもんね。すみませんなんて、誰も言わない。「おいっ」とか「その」って、呼び止めることが多い。まあ、用意してくれとか、取ってきてくれとお願ひする部類はまだいい。

女性であれば、用意してくださいさる？ 等と、さらに丁寧にお願ひっぽく命令する子もいる。けど、中には、用意しろ！ とか、とってこい！ みたいに、マジ上から目線で命令する子もいるんだよね。

貴族ってそういう立場だけど、多少は下や周りの印象を考えた方がいい。

とにかくそういう文化だから、丁寧にしていて悪い印象に繋つながることは少ないと思う。

もちろん、ここが王城というだけあって、使用人は貴族の関係者や貴族から紹介された方、もしくは代々王城で勤めている方が多いというのを考えて、丁寧に接している子もいる。

もしかしたら、自分の家より立場が上の貴族や、将来先輩になるかもしれないということまでイメージしてるのだろう……

もっとも身分至上主義派閥の子には、そこまで気を使っている子はいなさそうだけど。

同じ身分至上主義派閥の、自分より高位貴族の家から送り込まれた人も、この会場の使用人の中にはいるかもしれないというのに……

それを抜きにしても、丁寧に接すれば相手からはいい印象を持ってもらえる。普通に言葉を変えるだけで、好感度が上がる。何ともイージーモードな身分、それが貴族なんだよ。

周囲に侮られるというデメリットもあるけども、得てしてそういうのが丁寧かつ自然に行える人は総じて一目置かれてることが多いからね。普段の行動や、成果で。

ひとかどの人物がそういう風に、格下相手にも丁寧に接する。

そのことで侮ろうとしても、できるのは噂話をする程度。

丁寧に接された本人からすれば、舞い上がるほどに本当に嬉しいことなのだ。

あつ、私の場合は前世の影響が多大に出ているけど。すみません、を謝罪以外で使う場面なんて日常に大量にあるからね。

「お待たせしました」

自身の言動を振り返っていると、先ほど声を掛けた使用人の男性が、鴨のローストだと思われるものを届けてくれたので、笑顔で受け取る。

「ありがとう。今日は忙しそうね？ これ、どうぞ。疲れたときには、甘いものよ」

「ありがとうございます」

それからお礼に、鞆から飴を出して渡しておく。

「エルザ様の鞆には、どれだけお菓子が入っているのでしょうか？」

レイチェルが興味深そうに、私の鞆を見ている。

うん、特注のマジックバッグだから、すごい量のお菓子附が入っているよ。インベントリというスキルはなかったけど、マジックバッグはある世界でよかった。

時間停止機能がないから、本当にただの不思議な収納袋って感じだけど。そもそもが異空間接続

型のマジックバッグじゃなくて、内部拡張型だし。

しかし、この集団。なかなか、悪くない。

成り上がりのレイチェルに、身分至上主義派閥の裏切り者扱いのカーラ。騎士として由緒正しい家系のテレサとフローラ。身分至上主義派閥の代表的貴族家のオルガ……と、何やら彼女についてきたおまけの娘。

嫌われているような、憧れ^{あこが}られているような微妙な集団。入りたいような、入りたくないようなグループ構成だろうね。

だから、遠巻きに見られつつも、悪意を向けられることもなければ、下心のある男性に無理矢理話しかけられるようなこともない。

ソフィアに関しては、何人かは薄々と平民の特待生だと感じているそうだけど。

この中に馴染^{なじ}んでいる彼女は、本当に深窓^{しんそう}の令嬢^{れいじやう}って感じで、儚^{はかな}さもマシマシのお嬢様に見えるもんね。

村娘^{むらぢやう}だけあって、アクティブな部分も多いけれど、黙っていれば本当にお嬢様^{おぢやうさま}だ。

と言っても、同じクラスの子は、すぐにこの謎^{なぞ}の御令嬢^{ごれいじやう}の正体が、ソフィアだと気付いたみたいだった。

そりゃ、髪色も独特だし、一緒にいるメンバーが私たちだから、分かる人にはすぐ分かるか。

上級生の方たちは、そこまで詳しくは知らないだろうからね。いまだに、どこぞの貴族令嬢^{きしやくれいじやう}だと思われてそう。

「ふふっ……」

思わず笑い声が漏れてしまい、みんなの注目を浴びてしまった。

「どうされました？」

「な……何か、気分を害することでも？」

レイチェルは不審そうに聞いてきたのに、カーラは私が不機嫌になったと思ったのかな？ 彼女がちよっと怯^{おび}えた様子なのが、面白くない。

笑っているのに、その反応は酷いよカーラ。

「カーラ酷いよ。楽しいから、笑っただけなのに」

「そ……それは、よござりました」

なんか、年配の侍女みたいな言葉遣いになってる。

チラリと私がソフィアの方を見ると、今度はみんながソフィアを見る。

周囲の視線を集めたソフィアが俯いてしまったけど、私は気にせず彼女の背中を押し出して、みんなの前に立たせる。

「いえ、こうして着飾っただけで、彼女のことを知らない方々は、まるでソフィアを偉い貴族の箱入り娘だと勘違いしているのがおかしくって」

「はあ」

カーラが気の抜けた返事をしてるので、鼻で笑ってしまった。

「だって……身分至上主義をうたって、自分たちは特別な存在だと思っている方々でしょう……そ

れが、平民の彼女を自分たちと同列のように見ている姿って、滑稽でしょ？ 所詮、人の違いなんてその程度のものなのよ」

今度は、全員が納得顔だ。

オルガがすぐく同意してくるけど。それでいいのか？

身分至上主義派筆頭格の御令嬢として……うん、それでいいから、彼女も普通にこのグループに馴染めているのか。

彼女の実家としては、それでいいとは思えないけど。立場的に……役割的には、これが正解なのだろう。言ってみたら、彼女の家は身分至上主義派の筆頭格に数えられる家ではあるけれど、その内実は王族側と繋がっているスパイだし。

でも、もう少し身分至上主義派とも仲良くした方が、いいと思うよ。

「レイチェル、食べてる？」

「もちろん、食べてます。いつも、エルザ様は聞いてこられますよね？ それ」

「食べてなかったら、おすすめを探そうと思ったただだよ」

レイチェルのお皿には、料理が少しずつしか載っていない。

別にすでに彼女が食べ終えたわけじゃない。

こういう場所だとやはりイメージが大事なのか、食べる量が少なくなつて、そもそもあまりお皿に料理を載せないのだ。

それも、大きなパーティが面白いと思わない理由の一つだ。

だって、レイチェルより私の方が食べてるまであるし。私は周囲を気にする必要性を、全く感じたことがないからね。せっかくの美味しい料理を美味しそうに食べられない彼女を見ると、もどかしくて面白くないのだ。

そうそう、いつまでも放置するわけにもいかないし、オルガと一緒にいる子も紹介してもらわないと。

実は、小動物のように彼女の陰に隠れつつ、チラチラとこちらを見て目が合うと、照れくさそうに笑ってまた彼女の後ろに隠れるその子が私も気になって仕方ない。

「で、オルガと一緒にいるのは？」

「ええ、舞踏のクラスを取っている方で、オペリスク男爵家の御令嬢です」

「へえ、お名前は」

「あつ、ルナ様ですよ。二年生ですよ」

先輩だったのか。しかも、オルガが紹介してくれるのか。

とりあえず小柄な彼女に目線を合わせるために、少し屈んで微笑みかける。

彼女は、私と目が合ったら顔を真っ赤にして、すぐにまたオルガの陰に隠れてしまった。それから顔だけ、チラリと出してこちらを見てきたので、私もオルガの横から顔を出して挨拶をする。

「ルナ先輩も、仲良くしてくださいね」

「ひゃいっ！」

いや、先輩……もう少し、大人っぽい感じの振る舞いとか。見た目とはマッチしているけどさ。

「あら、ルナ嬢ったら、ここにいらしたのね」

それから楽しい時間を過ごしていると、シャルルが声を掛けてきた。

ルナ先輩が嬉しそうに、シャルルの横に移動している。うーん、シャルルも人気者かあ。

「この子の相手をしてくれて、ありがとうねエルザ」

「オルガが紹介してくれたんだ。それよりも、知り合いだったんだ」

「なるほど……ええ……この子、大人しいから放っておいたら、すぐにいろんな人たちに囲まれちゃって」

なるほど……それは、いい意味でかな？ 悪い意味でかな？

シャルルがちよつと鋭い視線をオルガに向けると、オルガは扇子を口元に当てて曖昧に頷いている。それを見たシャルルが、今度は満足げにしていた。

いや、視線だけで分かり合わないで？ いま、あなたたち、どんな会話をしてたの？

「例の子たちも、ルナを探していたから……どうしても、先に見つけないかと思ってね」

あつ、スルーされた。ふとシャルルの後ろを見ると、大人しそうな子が数人ついてきていた。

その中には、いかにも優しそうでありつつも、強い意志を持っていそうな先輩方も多く混じっている。

ああ、身分至上主義派対策か。シャルルもシャルルで、侯爵家御令嬢として、立派に役割を果たしているらしい。

「ソフィアさんも、楽しんでいらして？」

「ええ、すぐくきらびやかな光景とあまりの眩しさに、目が回りそうです」

「そう？ 貴女も十分に輝いているわよ？ 素晴らしいドレスね」

「……はい。エルザ様が用意してくださいました」

すごいでしょう！ 私のセンスがキラリと光る、最高のドレスを用意できたと思ったよ。

あまりにソフィアの反応がいいから、今度はオルガにマーメイドドレスを薦めてみようと思っている。きつと似合うはずだからね

「お優しいのはエルザの美德だけど、押し付けは駄目よ？ こんな高価なものをポンポン渡してい

たら、潰れちゃうわよ」

「はい」

「絶対、分かってないよね？」

「ふふ、シャルルが昔みたいになってきて、嬉しいわ」

私は思わずそうこぼす。

そういえば出会ってちよつとしたくらいに、急にシャルルがすぐお姉さんぶって色々と注意とか教えてくれたりしてたのを思い出した。

微笑ましいやら可愛らしいやらで、素直に付き合っ相手してあげてたら調子に乗ってお姉ちゃんと呼んでと言いだしたときは可笑しかった。

お姉さまじゃなくて、お姉ちゃんか……思わず笑ってしまった。

幼い彼女は笑われたのが恥ずかしかったのか、その後で泣き出したのであわてて「お姉ちゃん、泣かないで」と宥めた記憶も……

「もう……いつの話を持ち出しているのよ！ ソフィアさんも、エルザに何かされたら私かクリン様

にすぐに言うのよ」

「はい、ありがとうございます。でも、エルザ様は酷いことはされないし、言われないので」

「そうね……代わりに、親切の押し売りがすごいから」

「おおう……酷いことを言う、お姉ちゃんだ。」

「いえ、はは……でも、一生かけても返せないほどの、ご恩が」

「はあ……」

ソフィアの言葉に、シャルルが溜息を吐いている。

はやく、ダンスの時間にならないかな？ 少し居心地が悪くなってきたぞ。

私は誤魔化しがてら、苦笑しながら口を開く。

「ソフィアの笑顔はプライスレスだから、私も借りがいっぱい」

「もう」

呆れた様子あきのシャルルだけれども、私を見る目が優しいので少し気恥ずかしい。

「あっ」

会場の中から、そんな声が聞こえてざわめきが一瞬広がる。

それから、すぐに静寂が訪れた。

どうやらホール二階の扉が開いたようだ。

ということは、ダリウスがやっと来たのかな？

去年から王族も学生になったということで、堂々と参加ができるようになったらしい。

それまでは陛下が挨拶をして、その後王妃殿下が立派なテーブルで会場の様子を見るといった感じだったようだけれど。主催者にもかかわらず、対象外だから参加できないパーティを見るとか……絶対楽しくないよね？

今年はダリウスがいるから、陛下が挨拶したあとは王妃殿下も少し会場の様子を見て退場するぞうだ。

開かれた扉から、ステージ王国王陛下と、王妃殿下、ダリウス殿下が入場してきた。

両脇には騎士が控えているけど、あれがフローラかテレサのお父さんだったりするのかな？

そして陛下の横には、シャルルパパが控えている。

こつちをチラリと見たから小さく手を振ったら、ギクツとされた。

真面目モードだから反応を返せないけど、返そうとして慌てた感じかな？ もっと、アピールしたらどうなるだろう？

あっ、ダリウスも私に気付いたから、そっちにも、手を軽く振ってみる。

うわっ！ 目を細めてフツと温かい笑みを一瞬だけ浮かべて、表情を整えて前に向き直った。

自然と、かっこいい仕草ができるようになってるねえ。大きく手を振ろうかな？ その余裕の表情を、崩してみたくなってきた。

よしっ！ と気合を入れて手を上げようとしたら、私の横に立っていたシャルルに、そっと手を押さえられてしまった。バレたか……

ダリウスのせいで、少なくとも視線を私も浴びてしまっているからね。他の人に見られたら問題になるだろうとシャルルが気を使ってくれたわけだ。

私は、気にしないのに。

「さて、こうして今年も新しい子たちが多く、この地に来てくれたことを喜ばしく思う」

二階ホールからは会場が見渡せるようになっており、そこから陛下が歓迎の言葉を述べてくれた。「入る者もいれば、出る者もいる。卒業後も二年間は招待を続けるから、旧交を温めてくれ。それでは、いい夜を」

そう言って陛下が下がると、王妃殿下が続けて軽い挨拶をする。

エスコート役を息子であり王太子でもあるダリウスにして、二人で下りてきた。

さすがに王族ともなると、ママと手を繋いで階段を下りてきても照れることはないか。

シャルルパパは、陛下と一緒に下がっていつてしまった。久しぶりに会ったから、少しは会話できると思ったのに。

王族がパーティに参加したので、それまでホールに流れていた音楽が静かなものから曲調が変わる。参加者たちも弁^{わやま}えたもので、すぐに中央から場所を移動している。

慣れない一年生たちが、慌てて先輩方の真似をしているのが微笑ましいね。

ダリウスは王妃殿下に椅子を引いて席を勧めたあとは、自分も横に座って用意された食事を少し

食べていた。

まだダンスまでに、時間の余裕はありそうだ。

私たちの周囲では、一年生の男子がソワソワしているのが見える。けれどすぐに、一緒にいた先輩に宥められていた。

「最初は殿下に譲るべきだと思うよ。今年は、婚約者様も来られているのだから」

盗み聞きするつもりはなかったけど、耳がいいもんで。

女性陣も誘われるのを期待してそわそわしている。それでも、まずはダリウスが踊らないと始まらないのかな？

ダリウスのお相手は、私になるわけか……これだけの場所で先陣を切って踊るのは、少し遠慮したい。

私もダリウスもたぶん気にしないからね。その一年生、意中のお相手を誘ってもいいんだよ？ そう思っていたのに、私とダリウスの間を視線が行ったり来たりするだけで、会場の中にいる誰も動き出さない。

少し挙動が怪しい子たちもいるけど。こっちをジッと見ている一部の女性たちの視線が痛い。たぶん、ダリウスと私が踊るのを期待しているのだろう。少しワクワクした様子だし。

口を湿らせる程度に飲み物を口にしたダリウスが、王妃に耳打ちされて頷いて立ち上がる。それから、こっちにまっすぐ歩いてくる。

うん、出番は早そうだ。これで、私が誘われなかったら笑えるけど。

「殿下が来られたわよ」

こちらに向かうダリウスを見て、シャルルが教えてくれた。同じものを見ているから、教えてくれなくても分かるよ。

さっきお姉ちゃんと言ってからかったのを、根に持っているのかな？ それともお姉ちゃん願望を刺激されて、思い出したのかな？

でも――

「殿下！ 私と踊ってください！」

……すごいね。すごい子もいるもんだ。

明らかに私たちの方に向かって歩いてきてる、王太子殿下の道を堂々と塞げる子がいたなんて。ダリウスの前に飛び出したのは、これまた珍しい青髪で、純朴（じゆんぽく）そうな少女だった。

いや、ド派手なブルーの髪の毛で、純朴も何もないだろうって話だけれど、可愛らしい顔なんだけれど垢抜あかぬけてないというか……可愛いけれど、素朴な感じの……ごめん、地味なお顔立ちだよ。

学園内で青い髪なんて見たことないから、長期休暇ではつちやけてカラーリングしたのかな？ そうそう、普通にこの国にも髪の毛の染色技術はある。

まあ、髪の毛の染色自体はあつちでも、紀元前くらいからあつたらしい。たまにサガラさんが、こういった昔の話をしてくれるんだけど、当事者というか見てきた人からの話はやはり面白い。向こうからしたら、そういった行動自体が面白かつたらしいけれど。

ともあれ、この国では子どもや学生はあまりしていないけれど、大人たちには結構白髪染めをして

いる人が多い。お馴染みの紫やらピンクの鮮やかな髪色をした、懐かしい気持ちになる年配女性も少なからずいた。

そんなわけで、技術自体はあるので、長期休暇でおしゃれに染める子がいてもおかしくはないんだけど、色がちょっと派手すぎる。

会場を見渡しても、そんな派手な髪の子はいない……違った。少ししかない。

驚くべきことに、他にも数人目立つ髪の子はいた。赤が埋もれるレベルで。

たしかに、地毛が赤っぽい子はいるけど。地毛が緑はいないだろう。あと、赤は赤でもそれは違うだろうという赤。原色系の、派手な赤。赤毛とは呼べない……本当の赤毛ではあるけれども。

だから、青色がいてもおかしくはないと言え、ないけれど……TPO的にはどうなのだろう？

「あれは？」

「ピーキー男爵令嬢じゃない？」

「新人生が生意気にも、殿下の最初のダンスパートナーに名乗り出るなんて」

横でレイチェルが恥ずかしそうにしている。私とダリウスの婚約発表披露宴のときに乗り込んできたことを思い出したのかな？

頬を染めて俯いているけど、口に食べ物運ぶ速度が上がっている。照れ隠しか、周囲の視線が他所に向いたからか。

とりあえず、周りがざわついて、だれもこちらを注目していないうちに給仕に、彼女のための追加の料理を頼む。

「あの子に、おすすめの料理をたくさん」

「えっ？ いまですか？ この状況で……」

素直に承知しないのは、給仕失格だなあ……あれ？ 給仕とのやり取りを聞いていたシャルルとオルガが、微妙な表情で私を見ていた。

これ、招待客である貴族令嬢の指示を聞かない給仕が悪いんじゃないの？ このタイミングで指示を出した私が悪いの？ いや……身分的に、まかり通ることでしょう？ この世界だと。

あと、普通に前世の普通以上のホテルの普通のホテルマンが普通のお客様を相手にしてても、この程度のお願ひなら普通はすぐに叶えてくれると思うんだけど。

別に私が間違っているのを認めたくなくて、普通を強調したわけじゃないよ。本当に普通だと思ってるから。

だって、給仕の男性の両手が塞がっていたり、明らかに作業をしていたりする状況じゃないからね。

あつ、全員の視線が一瞬こっちに向いたのを感じた。やつぱり、私がおかしいのかな？

「いま、料理を頼んだのは、まずかったかな？ すごい、視線を集めちゃったみたい」

「違いますから。エルザ様の婚約者が、他の女性に最初のダンスパートナーを強請^{ねだ}られているのですか？」

オルガが扇子で口元を隠しながら、私に囁^{ささ}いてきた。そういうことか……ふーん……で？

「それが？ 別に受けるも受けないもダリウスの自由ですし」

「私が注意してきましょうか？」

オルガの言葉に特に気にした様子も見せずに答えると、カーラがそんなことを言ってきた。

「では、私たちもカーラについていきますよ」

そしてフローラとテレサも動き出そうとしている。

ちよつと待て！

「いや、いいから。こんなことで、いちいち目くじら立ててもしょうがないでしょう。そもそも、あの子のことなんて何にも気にしてないんだけど？ 注意とかしないでいいから」

私の言葉に、全員が微妙な表情を浮かべていた。

いやいや、ダリウスが対処すべきことであつて、私が文句を言うのはお門違い……ではないか。婚約者のいる男性を誘惑……誘惑^{さくわく}って年齢でもないな。

可愛らしい少女が少し年上のお兄ちゃんにダンスをお願いする、とても微笑ましい一幕だね。

「なに急に優しい目で、泥棒猫を見てるんですか」

「泥棒猫って……言葉が、悪いよ」

「申し訳ありません」

カーラが何やらワーワー言つたので、首を傾げてみせる。

あと、汚い言葉は注意しておこう。こういう言葉を使っていると、性格もそっちに向かつて行きそうだし。せっかく、いい感じに矯正^{きようせい}できてるから、小さな問題も見逃さないようにしないとね。

「つて、いやそうじゃなくて！ 殿下が、取られてもいいのですか？」

「ん？ その殿下様なら、サラリとお誘いを躲^かしてこっちに向かつてるけど？」

ダリウスは普通にその青髪の少女の申し出を断って、こっちにまっすぐ向かつてきていた。

周りから、黄色い声援と熱を孕^{はら}んだ視線が私にまで向けられる。

目立つな、この王子様。これであの青い髪の子が、注目を受けるための仕込みだったらウケる。

「せっかくスマートにダンスのお誘いに來たのに、何やらまた楽しい面白くないことを考えているだね」

ダリウスはまっすぐと私の前まで來ると、声を掛けてきた。

私の周りにいた子たちが、すっと一歩下がる。

あ……私の楽園が……てか、楽しい面白くないことってなに。なんか、言い方に疲れが見える。「楽しいことを考えていそうだけど、私にとって面白くないこととか失礼なことを思っただねと」

「よく分かりましたね」

ついでに言えば、取り巻き候補を人数分揃えてうちの可愛い子たちのパートナーにするくらいの気遣いは見せてもらいたい。

いきなりダリウスと二人だけで、この広いホールで踊り出すのはちょっと恥ずかしい。

「私と踊ってくださいか？」

ここで断ったらきつと楽しいんだろうなと思いつつ、そんなことは無理だと分かっているの承知するよ。

というか一人称、今日は私か。そういえば最近、全然、余^よって言わなくなったな。

なんて関係ないことを考えて現実逃避しながら、ダリウスの手を取ってホールの真ん中に歩み出る。

音楽がまた変わって、優雅でありながらも少しアップテンポな曲になったので、私たちもタイミングを合わせて踊り出す。

幼い頃から何度も踊ってきた相手だから、緊張することもないし息もびったりだ。

周りからは一瞬溜息が漏れたあと、音楽以外の音が聞こえなくなった。

みんなが、こっちに注目しているのが分かる。

あっ、レイチェルが隠れて何か食べてる。

表情だけで、それが美味しいことが分かるけど。ほったたを膨^はらませて、そんな満面の笑みを浮かべてたら、ダンスホール挟んで反対側に並んでいる人たちから丸見えだよ。

それに音のしない食べ物を選んだのかもしれないけれど、隣にいるシャルルとカーラにはしっかりと見られてるし。

二人ともやや呆れた表情だったけど、私としてはそのくらいの気持ちで眺めてもらう方が気楽でいいのに。

是非、他のみんなも料理を食べながら、歓談しつつ横目で見える程度に抑えてくれないかな？ 視線が痛いから。

「いまは、私だけを見てもらいたいかな？」

レイチェルの方を見ていたら、ダリウスにそんなことを言われた。

まさかナチュラルに「俺だけを見ろよ！」を言うことができるとは。少しだけ、キュンツと……ならない。いや、かついいいけどさ。

どうしても、少しませた年下の子を見ている気持ちになるんだよね。

こんなことで、将来結婚してやっていけるのかな？ いや、ダリウスがもう少し大きくなったら考えも変わるかな？ 申し訳ないけれど、中学生相手に懸想するほど、精神年齢は若返ってないんだよ。

「少しは嫉妬^{しつと}してくれるかと思ったのに」

「ん？ 何がですか？」

「さっきのことだよ」

ダリウスも私も二人で注目されながら踊ることに慣れているから、こうやって小声で会話をするくらいには余裕がある。

周りからは、ダンスに集中していると思われるかもしれないけど。いや、楽しんできてるかな？ お互い笑顔だし。

「先ほどの？ ああ……選ばれるのは殿下ですから、私が口を挟むことでもありませんし。それに、結局のところ私を選んだので、別になんでもないことだと思えますよ」

「いやまあ、そうなんだけどね。助けに来てくれるかと思ったのに」

そう言って少し拗ね^すた様子のダリウスに、幼い頃の面影^{おもかげ}を見て可愛らしく思ってしまった。初対

面のおときは、可愛くなかった……ませてるどころか、老けてるとか思ってたけどね。

それからまるまる一曲分踊りきって、会場に向かって礼をする。

「さあ、これからはみんなも自由に踊ってくれ」

ダリウスの言葉を受けた途端に、そわそわしていた男子たちが一斉に動き出した。

なぜか、うちのグループに向かってくる子がいないのが腹立つけど。

こんなに可愛い子が揃ってるのに……と言いたいけれど、勢いよく声を掛けにくるような、そんなチャライ男どもにこの子たちは渡せないよね。

そして、一部の……数少なくない女性陣が、私に対して期待した視線を送っているのはなぜだ？ 「さすがに殿下の婚約者であるエルザ様は、クリント様以外の男性とは踊れないでしょう……けど、女性なら踊れると思われているのでは？」

首を傾げている私にカーラが教えてくれた。ダリウスも苦笑いしている。

「成果発表会の後から、あの場にいた女子生徒のほとんどの方がエルザ様と踊るのを夢見ているのですよ」

付け加えるようにオルガに言われて、思わず首を横に振ってしまった。

確かにあのとき、私はかなり目立っていたと思う。

それにしても、この会場にいる有能な男子を探して縁を繋ぐより、私と踊りたいと思ってる女子が多いとは。

大丈夫かな？ 私に負けてる男子も、女性である私と踊りたい女子も。少しだけ学園の……いや、

この国の将来が心配になってきた。

「国母となる予定の女性が、女性層の支持を受けているのはとても頼もしいね」

「そうですか？　ならいつそのこと、レイチェルとテレサとフローラとで剣の舞でも踊りまじょうか？　みんな、かつこいいですよ」

「男性陣の立つ瀬がなくなるから、やめてあげなさい。あと、会場が物理的になくなっても困るから、剣を振り回さないでもらいたい」

ダリウスが困った様子で、窘めてきた。どうやら、授業中の素振りによる訓練場破壊のことを言っているらしい。

あれは、ただの事故だったのに。意識して振ったら、あんなことにはなりませんよ。

「お嬢はもう大人しくしていた方がいいんじゃないかな？」

少し離れた場所で見えていたクリントが、こっちに来て私に料理を手渡してきた。

だったら友達も一緒に連れてこいと言いたい。ここに壁の花がたくさん並んでいるのに……

おっと、シャルルにはすでにお誘いが来ていた。彼女と一緒に合流した先輩方も誘われている。

さすがに二年生ともなると、男女の交流も多少はあるだろうし。

なんなら、シャルルと行動をともにしていた子同士でパートナーを組んでいるから、あまり寂しいことにはなっていないようだ。

ルナ嬢も、同じような大人しそうな男子と踊っているし。顔見知りなのか、彼女の表情も柔らかいから大丈夫そうだ。

となると残されるのは、クリントと私と一緒にいる一年生の女子だけだけれど……オルガが真っ先に男子生徒に声を掛けられて断っていた。なんで？

「私も、エルザ様と踊りたいので」

なんで！

そして、ソフィアはダリウスが来てからは、完全に空気になろうとしていた。

いや、周りからは誘いたいオーラが全開で、ソフィアに向けられているけど。さすがに高位貴族と王族に囲まれたら、固まるのは仕方ないか。

あっ、胡散臭い人代表のロータス先輩が、知り合いを六人連れてこっちに向かってきている。

みんな、逃げて！

結局、うちの可愛い子たちは、ロータス先輩が連れてきた人たちに連れていかれてしまった。

まあ、一曲分だけだろう。

色鮮やかなドレスを纏った子たちがクルクルと回ると、裾が広がってとても華やかに見える。

そう、思った以上にイメージ通りのドレスなんだよ！　ここにきている子たちが纏っているドレスが。

それ存在したの？　って思えるようなデザインのもが散見されるし。なんなら、袖に社交ダンスで見るようなフロートのついたドレスまである。

個人的には見慣れてるから違和感はないけれどさ。色々とモダンな物が街中にも溢れているし。

逆にバスルという、後ろにお尻が飛び出したようなドレスはほぼ見ない。でもロココ風のパン
工は少なからずいる。

そんな中でも、私が選んで仕立ててもらったドレスを着たうちのソフィは、キラキラに輝いて見
えるよ。

自分で選んだから鼻^{ひいきめ}目に見てる部分もあるかもしれないけど、会場内では唯一無二のドレスだ
からね。物理的にもキラキラしてるんだ。スパンコール最高。

「随分と変わったドレスを贈ったんだね」

ソフィアの踊る様子を見て、ダリウスが飲み物を手渡ししてくる。

ごめん……彼が来るまで割と飲んだり食べたりしてたから、気持ちはいけどそんなに喉^{のど}
は渴^{かわ}いていないんだ。

とりあえず受け取って、ソフィアの方を眺める。

たどたどしい足取りで、一生懸命踊る姿は可愛らしいけど。やっぱり、この辺りは平民の娘とし
て育てられてきたんだというのがよく分かる。

視線が常に首より下に行ってるから、ダンスのレッスンとかだったらかなり注意されそう。ここ
から上手になるのは、大変そうだね。

「それよりも、ロータス……先輩はよかったですか？」

「ああ、彼は婚約者もいるからね。渡りに船だっただろう」
ちなみにソフィのダンスの相手は、クリントだ。

そして、レイチエルはチャールズ先輩と踊っている。

ソフィの制服が汚されたときに、私をロータス先輩と一緒に見張っていた人。ロータス先輩と
違って、純粹^{さむ}に爽やかな感じの人だ。

少年と青年の間にあるような年齢だけれども、背も高いスタイルもいいから青年と呼んでも
差し支えないイメージだね。老けているわけじゃなくて、大人の雰囲気がある子だ。

それと、身体は鍛えこまれているけど、無駄な肉が付いていないおかげで細くも見えるし。いい
細マッチョだ。

「彼、剣聖の孫だから」

レイチエルとチャールズ先輩を見ていたら、ダリウスが耳打ちしてきた。

へえ、剣聖のエドワードさんのお孫さんかあ……剣聖エドワードと言えば、ソードマスターの名
をほしいままにする剣豪で、私も何度か剣の腕を見てもらったこともある。

おじいさまの伝^{つて}手で……そう、彼はおじいさまの現役時代の練習相手で、学生時代の後輩らしい。
剣の技術のみならず、おじいさま以上の猛^も者だけれど、おじいさまは武器全般を扱える上に、臂^{りき}力^{ちから}
や打たれ強さも尋常じゃなく、剣聖の技術をもつてしても手に余るらしい。

こんな可愛らしいお孫さんがいるなら、うちに来たときに紹介してくれてもよかったのに。

それにしても、チャールズ先輩は剣聖の孫で、王子の側近候補と……これまた、ありきたりな役
どころが出てきたなあ。ハルナの妄想が捗^{はか}って、喜^うびそうな人物像だ。

そしてレイチエルが時折、ソフィアをチラチラと羨^{うらや}ましそうに見ている。